

国語科 3年A組	ぼく・わたしが語り手 音読絵本「モチモチの木」を作ろう	湯浅 明菜
-------------	--------------------------------	-------

1. 単元について

(1) 3Aの子どもたち

初めて子どもたちと出会ったとき、弾けているように元気があふれているようだと思ったのが第一印象であった。じっとしてられない、何かあればすぐに動く、気づいたことを言わずにはいられないなど、自分が動ける場面はないかと常にうかがっているかのように感じた。反面、聞くことには課題がある子どもたちが多く、聞くことを大切にしようと指導を続けてきている。

授業では、分からないことを大切にしている。分からないことを出させることで、学ぶことが多分にあるということを実感する経験を積ませたい。まずは、素直に「分からない」と言えるようにすることで、安心して発言できる学級風土へとつなげていきたい。授業のめあてに沿って各自で活動してから出てくる諸問題について、「今、こんなことで困っている」と話させることで、課題を見つけ、解決し合おうとしている。そうすることで、「それ、私も困っているんだ」「それだったら、こうしたらいいよ」「こうすればできるんじゃないかな」と、つながり合い、焦点化させていく姿が見られるようになってきている。しかし、次々と疑問や考えが浮かんで即座に発言し始める子どもも複数人いるため、話し合いの話題が逸れてしまい、教師が話を整理したり戻したりする場面も多い。

話し合い活動においては、全体での話し合いに加え、2～4人組で行ってきた。話し合いの話題に沿って活動することを楽しむ子どもが大半である中、グループでの話し合いになかなか参加できない子どもや、仲間からのちょっとした指摘にすぐに心が折れてしまったり学習に向かえなくなる子どももいる。個別の支援と、周りの子どもが温かく受け入れる学級作りに努めているところである。

(2) 教材「モチモチの木」について

本作は、民話のようであるが、斎藤隆介による創作である。斎藤氏は、自らの作品を「創作民話」としてしている。民話は語り手によって口承されてきたものであり、本作でも語り口調により豆太のことが語られている。語り手になって伝えるという目標を設定することで、語り手となる自分の、豆太に対する見方を音読で表現しようとするすることができる。

作者は、冒頭、語り手に「全く、豆太ほどおくびょうなやつはいない。」と豆太のことを語らせている。夜に一人でせっちんに行けないほどのおくびょう豆太が、じさまの苦しむ姿を見て家を飛び出し、必死になって医者様を呼びに行く。そして、勇気のある子どもしか見られない「山の神様のまつり」が、豆太には見えた。じさまは「おまえは、一人で、夜道を医者様よびに行けるほど、勇気のある子どもだったんだからな。人間、やさしささえあれば、やらなきゃならねえことは、きっとやるもんだ。」と豆太に話す。最後にじさまが豆太に話して聞かせる言葉がこの作品の主題であり、モチモチの木の山の神様の祭りはその象徴ともみることができる。主人公豆太の行動、じさまとの関わり、そしてモチモチの木の存在から、豆太の人物像や主題に迫ることができる。

2. 本実践の主張点

グループや学級のみinnで話し合う中で音読表現を工夫しようとする中で、登場人物の行動や様子の変容に着目し、主題に迫ることができる。

私が国語科授業において大切にしたいと考えているのは、音読を効果的に活用することである。

次期学習指導要領においては、「音読、朗読」が、指導事項の内容〔知識及び技能〕の一つとして明記された。第3、4学年においては「文章全体の構成や内容の大体を意識しながら音読すること」とされている。そのことに関して、「文章全体として何が書かれているのかを大づかみに捉えたり、登場人物の行動や気持ちの変化などを大筋で捉えたりしながら、音読することを示している。なお、黙読を活用し、文章の内容の理解を深めることも重要である。」と記されているように、本研究においても、音読を通して読み取ったり、読み取ったことを音読につなげようとしたりすることで読み深め、伝え

合う力を育てていきたい。

高学年になるにつれて音読にためらいを見せる子どもが増えると感じる。そこで、低学年や中学年では、声に出して読むことを楽しめるようにしたい。音読に対する意欲を保ち、向上させることは、ひいては言葉の力や伝え合う力にもつながると考える。

本単元においては、音読を聞いてもらうために、自分はどのような思いをもって読むのかと考えるかという根拠を大切にす。子どもたちは、それぞれの受け取った主題について語り、作品の読み聞かせを行う。読み聞かせをしようとするこ、作品に対する自分の思いや考えを表現につなげようとする姿につながり、作品をより深く読み、味わおうとすることができる。【モチモチの木】のどのようところが伝わる音読にしたいかを、子どもたちが意識しながら学習できるよう展開したい。

音読絵本については、一人1つの絵本を作る。挿絵に合わせ、音読を吹き込むこ、各自の音読絵本を作成す。録音することにより、自分の音読表現を確かめながら繰り返し読むこ、作品に対する自分の思いや考えを表現につなげようとする姿につながり、作品をより深く読み、味わおうとすることができる。子どもたちには、作品から読み味わったことについて聞き手に伝えるこを大切にしながら学習を展開させたい。

3. 単元目標

登場人物の人物像、作品の主題について、人物の行動や出来事など叙述を基に捉え、自分の考えを伝えたり、音読で表現しようとしたりする。【知・技（1）ア、読イ・オ】

4. 単元計画（全10時間 本時5／10）

第0次 教師による読み聞かせやブックトークを通し、斎藤隆介作品に触れる。	並 行 読 書 斎 藤 隆 介 作 品 を 読 む
第1次 「モチモチの木」作品世界や構成に興味をもって読む。 ①「モチモチの木」を読み、初発の感想を交流する。 ②登場人物、語り手の存在、設定、作品の構成について考える。	
第2次 「モチモチの木」について話し合いながら、作品や登場人物に対する自分の考えをもつ。 ③豆太の行動を追って読み、あらすじをつかむ。 ④じさまにとって豆太はどんな子か、話し合う。 ⑤豆太はどんな子か、話し合う。【本時】 ⑥豆太が見たモチモチの木について話し合う。 ⑦「モチモチの木」で一番大事にしたい言葉について話し合う。 ⑧作品や登場人物に対する自分の考えをまとめる。	
第3次 音読絵本「モチモチの木」作成を通して、自分の思いをもって音読する。 ⑨（+家庭学習、読書タイム）「モチモチの木」の音読を練習する。 ⑩「モチモチの木」の音読を録音する。 ○音読絵本を、附属っ子に見てもらう。	

5. 本時について

本文のどこから豆太のことをやさしさが伝わってくるかを話し合う。子どもたちは、じさまを助けようと一生懸命なところを根拠として話すであろう。

じさまの言葉「弱虫でもやさしけりゃ」に着目させたい。弱虫でもやさしけりゃいい、とじさまが言っている意味について話し合い、また、そのことについて自分はどう思うか考えられるようにしたい。